

ジャガイモ (バレイショ)



(10アール当り)

時期	方法	資材と施用方法
地力作り	<p>右記3種を同時に投入し、耕起する</p> <p>なるべく早く行きい土壌を安定させておくのが良い。(堆厩肥を投入する場合は、その土中醗酵・安定のために、植付けまでに、1ヵ月以上おくこと)</p>	<p>●ラクトバチルス600g →排水・通気性がよく、連作の効く地力を作る。</p> <p>●堆厩肥1~2トン(または米ヌカ150kg以上)</p> <p>●硫安60kg(肥沃な土壌なら40kgで充分) ※特に痩せ地で堆厩肥が少ない場合のみ硫酸カリ20kgを追加。 ※硫安を推奨、もし複合肥料ならチッソ成分10~14kgとする。</p> <p>※初年度などで、特に土壌pHが異常な場合は田畑の大将<赤>か畑の大将<青>を地力作り時にも投入して、土壌全体のpHを調節しておく。</p> <p>ジャガイモは、やや酸性(pH:5.5~6.0)を好む。ソーカ病対策で低pH(5.2以下)が良いとされていて、5.0でも生長するが、行き過ぎてpH:4.8以下になり、生育不調で黒アザも多い畑がよく見られる。酸性すぎる弊害が心配。他方、pH:6.0~6.8でも(微生物群が活発なら)生育の良い畑も多いのが実情。田畑の大将<赤>を毎作施用していると、自動的にpH:5.8前後になる。</p> <p>※堆厩肥はラクト・バチルスにより安全に醗酵・分解するので、ソーカ病は多発しない。過乾燥になり難く、植付け時には土壌EC:0.2以下となる。</p> <p>※農薬の土壌消毒は原則としてしない。もし土壌消毒をした場合、肥料分が効き過ぎ。農薬の毒性が消えた後に、ラクトバチルスを補給する事。</p>
ウネ作り時の散布	<p>ウネ上全面に散布する なるべく土と混和するのが効果的</p> <p>植付け前後に条撒きする場合は、種イモから5cm以上離す事 (または地力作り時の同時投入も可)</p>	<p>●田畑の大将<赤>60kg~40kg ※最初の年には60kgの施用を推奨。 カルシウムはジャガイモの重量と品質を決定する、大事な栄養素である。</p> <p>※土壌pHの調節は地力作り時に行っておく。もし植付け直前に土壌pHを変動させると(pHを下げてても上げてても)、ソーカ病が発生する事がある。</p> <p>※マンゾク粒状30~60kg →萌芽・生長を速く、強く促進。 ソーカ病、青枯れ病、連作障害が心配な畑では60kgを施用。</p> <p>※早掘り栽培などで、特に速い収穫をねらう場合のみ、硫安20kgも植付け前に散布する事がある。ただし複合肥料は使わず、植付け時の土壌EC:0.3~0.4まで。チッソの施用でイモのデンプン含量が上昇し難い傾向になりますので、一般には推奨できない。マンゾク粒状を使用する事。</p>

(10アール当り)

時期	方法	資材と施用法
植付け直後	種イモの植付け・覆土後(～3日以内)に灌水	● 根っ酵素1ℓ を500倍程度に薄めて灌水 (ただし水量はタヅリ染み込むほど多く) →出芽・初期の根張りを揃えて促進し、土壤障害も軽減。 ※もし植付け20日後・出芽期迄に出芽・発根が揃わないなら酵素液を繰返す。
着蕾期の調節	(植付け40日後、出芽20日後)新イモが着いて肥大を始める転換期の調節	● 花咲くCa液500倍 を葉面散布(通常1回) →新イモを揃って成り着かせ、肥大・充実の素質を作る。 (オトナの栄養バランスに変える時期) ※もしチッソ過多・過繁茂の場合は、この頃から(35日後)開花終りまでの期間、なるべく早めに、5～7日間隔で2～3回のCa液の葉面散布を繰返す。

【注意】 開花後半以降は乾燥気味で肥切れとなるべき転流・成熟期ですから、原則的に肥料は何もしない事。
もし根を動かしたり、チッソなどの肥料を効かせたりすると、イモの品質が低下。

上記は、特に高品質のイモを連作するために、土つくりと施肥を全面的におこなう場合の施肥例。

デンプン含有率14%以上～20%(比重1.08～1.11)と芯まで充実し、粉フキとなり、肌がキレイで美味しいイモが安定して出来る。しかし最初の年は差し当たって、田畑の大将(赤)の施用を推奨。

従来通りの施肥(元肥)の時に田畑の大将(赤)60kgを加える事。

その作用は…

- ① 土壌pHをジャガイモに好適な、やや酸性に安定させる。アルカリ性の石灰とは逆に、ソーカ病をおさえる働きをする。土壌は安定し、連作するほどよく出来る畑になる。
- ② カルシウム栄養をジャガイモに供給する。カルシウムの効いたジャガイモは過繁茂にならず、イモがそろって肥大・充実し、空洞がなく、デンプンが多くて美味しく、肌もキレイに。ぜひ試食を。